

フランス語の前置形容詞と後置形容詞（1）

——初学者に付加形容詞をどのように教えるか

二 瓶 恵

1. はじめに

外国語として初めてある言語を学習する際、すんなりと習得できる部分と理解に時間を要する部分、つまり難しいと感じる部分とに分かれる。後者は、大抵の場合学習者の母国語もしくは既習言語（日本人学習者の場合は多くは英語）にはない言語システムに出逢った時である。人は無意識のうちに既に体得したある一定のルールに従って言語を運用しようとする。その時に、これから獲得しようとする新言語がその規範から外れた時に学習者は混乱し難しいと感じるのである。

本稿では、フランス語における形容詞の位置とその機能を取り扱う。フランス語初学者がかなり早い段階でぶつかる壁として「形容詞」の位置の複雑さが挙げられる。フランス語の名詞に性（男性名詞／女性名詞）と数（単数／複数）があることを学習者は最初の段階で学習するが、その次の段階で名詞を修飾するものとして形容詞を学習する。形容詞も名詞同様性と数の区別があり、それは修飾する名詞の性数に倣う。ここまでは然程問題は生じないのだが、通常は「名詞の後ろ」としながらもある特定の形容詞は「名詞の前」として挙げられ、また中級へ進むと「名詞の前と後ろ」の両方に置くことができそれぞれで意味が変わると出てくる。この複雑さがフランス語学習者を戸惑わせ、フランス語は難しいものという苦手意識を持たせてしまう。実際、大学前期の授業を終えて第二外国語としてフランス語を学んだ学生たちから聞かれるのは、「形容詞が難しかった」「形容詞で躓いてしまった」という声である。初学者に教えるにあたって、どのようにこの形容詞の壁を日本人学習者に乗り越えさせられるか、彼らの母語である日本語と比べながら考察していきたい。本稿での考察が初学者をよりよく導く有効な手段につながることを願い分析をしていきたい。

2. 形容詞とは何か

2-1 形容詞の概念

そもそも形容詞とは何か。adjectif（形容詞）の語源は、ラテン語のadjectivumに帰するもので、adjicere＝付加する、jacere＝投げるという意味から派生した語である。つまりは、なにかしらの意味（情報）を付与するものであり、日本語の形容詞という言葉も示す通り、物や人の性質や状態を表すための品詞である。つまり、名詞または代名詞に付きそれらを修飾する⁽¹⁾。従って、形容詞は単独では存在せず、名詞または代名詞と密接な関係を持つ。ここまではどの言語でも一緒である。

名詞または代名詞を補足修飾する形容詞には、大きく分けて2つの用法がある。いわゆる名詞に直接付くものと、動詞（フランス語では繫辞にあたるêtre動詞）の後ろに付くものである。前者をépithète（付加形容詞）と呼び、後者をattribut（属詞）と呼ぶ。本稿で取り上げるのは、前者の付加形容詞、つまり名詞に付いて意味を補う形容詞である。

2-2 形容詞の種類

「形容詞」と大まかに分類されるが、実は形容詞に分類されるものには複数の種類がどの言語にも存在する。フランス語は以下の7種類が存在する。

- ①品質形容詞 (adjectif qualificatif)
- ②指示形容詞 (adjectif démonstratif)
- ③所有形容詞 (adjectif possessif)
- ④序数形容詞 (adjectif numéral ordinal)
- ⑤疑問形容詞 (adjectif interrogatif)
- ⑥不定形容詞 (adjectif indéfini)
- ⑦関係形容詞 (adjectif relationnel)

①の品質形容詞と呼ばれるものがいわゆる一般に言われる「形容詞」であり、それ以外の形容詞は総称して限定形容詞と呼ばれる。英語でいうところのthis（この～）、my（私の～）、all（すべての～）などといった名詞を限定するものであり、本稿では「品質形容詞」のみを取り扱うこととする。

3. 形容詞の位置

3-1 母語（日本語）または既習外国語（英語）における形容詞の位置

では、なぜ日本人学習者はフランス語の形容詞を格別難しいと感じるのか。それは、母語にはないルールがそこにあるからである。我々の母語である日本語において、形容詞は名詞の直前に置かれる（きれいな花、小さな家）。それは日本人が最初に学ぶ外国語である英語に置おいても同じである（ex. beautiful flower, small haouse）。

3-2 フランス語における形容詞の位置

では、フランス語ではどうか？フランス語では、大きな前提として「形容詞は名詞の後ろに置かれる」というルールが成り立っていることを学習者は知らされる。今まで形容詞は名詞の後と無意識のうちにインプットされてきたので、母語とは違うルールに学習者は戸惑いも感じるが、そういう決まりというのであればそれが新しい言語を学ぶということであるから納得もいく。これは、「まず実体が存在し、性質は実態に付随するものであるから、実態を表す名詞を先におき、性質を示す形容詞を後におく」という理論的思考に一致する⁽²⁾ というフランス語の考え方であり、説明を聞けば納得もできる。

【名詞＋形容詞】の例

un livre intéressant	興味深い本
une voiture française	フランス製の車
des films difficiles	いくつかの難解な映画

ところが、学習者を混乱させるのはそれとは逆のルールが同時に成り立っているところにある。つまり、「名詞の前に置かれる形容詞もある」ということである。そして、それらの形容詞はよく使う重要なものばかりである。

【形容詞＋名詞の例】

une grande maison	大きな家
une petite fille	小さな女の子
un vieux film	古い映画

3-3 前置形容詞と後置形容詞

では、前置形容詞（名詞の前に置かれる形容詞＝日本人学習者にとっては新たなルール）と後置形容詞（名詞の後ろに置かれる形容詞＝日本人学習者にとっては既習のルール）にはどのようなものがあるのか。

大まかに説明をすると、大抵の参考書や教科書には「一般的にはフランス語の形容詞は名詞の後ろに置かれる。ただし、日常的によく使われる音節の短い形容詞は名詞も前に置かれる」とある。この規則が抽象的だと感じどう使い分けたいか分からないという学習者のために、大抵の教科書や参考書では実際に名詞の前に置かれる形容詞はリストアップされており、その数は初級の段階では多少の差異はあるが8～10程度である。

【前置形容詞】

① <i>grand(e)</i>	大きい、背が高い
② <i>petit(e)</i>	小さい、背が低い
③ <i>bon(ne)</i>	良い、おいしい
④ <i>mauvais(e)</i>	悪い、おいしくない
⑤ <i>beau(belle)</i>	美しい
⑥ <i>joli(e)</i>	きれいな、かわいらしい
⑦ <i>long(ue)</i>	長い
⑧ <i>vieux(vieille)</i>	古い、年を取った
⑨ <i>jeune</i>	若い
⑩ <i>nouveau(nouvelle)</i>	新しい

上記の前置形容詞に共通する部分は、確かに（1）日常的によく使われる形容詞であること、（2）音節が短いこと、が挙げられる。この音節が短いというのは、時に外国語が苦手な学生には「スペルが短い単語」と誤解されてしまう場合があるが、スペルの数と音

節の数はイコールではない。音節とは、「音を発する際のもっとも小さな塊」のことであり、母音を含む最小の単位である。日本語では書いた文字と音の数は必ず一致する言語であるがゆえ（子音が連続することは決してないので必ず母音を含む言語）、この概念を理解するのに少々時間が掛かる学習者もいる。音節が崩れるとたちまちその言語としての正確性を失ってしまうため、初学者には指と声を使って、例えばスペルの長い単語を発音するときには、nouveau（新しい）をnou [nu]・veau[vo]と発音しながら1・2と2音節であることを示すようにしている。発音記号を習ったことがない学生たちも今は多いので、辞書を見ても正しい発音に分からないままのケースも多く見受けられる。音節が短い（ここでいう音節が短い＝2音節とされる）形容詞を教える際には、発音しながら指と声でカウントしてあげることは初学者には有用である。

もう1つ、前置形容詞／後置形容詞の見分け方として、フランスでは「主観的形容詞＝les adjectifs subjectifs」と「客観的形容詞＝les adjectifs objectifs」という区別の仕方もある。つまり、誰が見ても同じ判断になるものは名詞の後ろに置かれる形容詞であり、比べるものまたはみる人によって判断が変わるものは名詞の前に置かれる形容詞であるとするものである。確かに、赤い車は誰が見ても赤い車であろうし（＝後置形容詞）、高い山という場合はどの山と比べるかまたはその山を見ている人によって基準は変わるであろうから（＝前置形容詞）、こちらの説明も納得がいきやすい。学習者ができるだけ納得しながら習得できるように、日本式とフランス式の両方の説明を学習者にはするようにしている。

前置形容詞は上記の通り数から見れば少数派であるが、重要な形容詞がずらりと揃っている。学習者はこれらの前置形容詞（初学者であれば10程度）を覚えれば、他はすべて後置形容詞と思ってよいと説明する。「フランス語を正しく読み、書き、話すために必要な規範文法の書である」と明記されている『新フランス広文典』によると、「品質形容詞が付加形容詞として名詞を修飾するとき、形容詞を名詞の前に置くべきか、あとに置くべきかについては的確な規則はない。しかし、一般にフランス語では、付加形容詞は名詞の後に置かれる。したがって名詞によって示される実体よりも名詞に付随する性質を強調したいときには、逆に形容詞を名詞の前に置くことがある。このような理論的要求・文体的要求のほか、いろいろな習慣に左右されており、その位置を決定することは困難である。しかし規範文法の立場からは、付加形容詞の位置を次節のように規則だてることができる」。以下、その例を幾つか引用する。

【後置形容詞】

1 原則的に形容詞は名詞の後に置く

un homme *sérieux* まじめな人

un cadeau *magnifique* すばらしい贈り物

- 2 短音節の形容詞, または関係する名詞よりも音節数が少ない形容詞は名詞の前に置かれる。

un *beau* paysage 美しい景色
une *petit* garçon 少年

- 3 色彩を表す形容詞は名詞の後

l'oiseau *bleu* 青い鳥
du vin *rouge* 赤ワイン

- 4 形状を表す形容詞は名詞の後

la table *ronde* 円卓
le clocher *pointu* 尖った鐘楼

- 5 政治, 行政, 経済, 社会, 学術の専門語のように感情的意味の乏しい形容詞は名詞の後

le parti *socioliste* 社会党
la littérature *comparée* 比較文学

- 6 固有名詞から派生した形容詞も名詞の後

la philosophie *sartrienne* サルトル哲学
le restaurant *normand* ノルマン風レストラン

- 7 補語を取る形容詞も名詞の後

les choses *nécessaire* 生活に必要なもの
à la vie le verre *pleine d'eau* 水がいっぱいのコップ

- 8 形容詞に転用された分詞・名詞は名詞の後

le soleil *couchant* 夕日
le temps *perdu* 失われた時

3-4 前置と後置で意味が変わる形容詞

フランス語の形容詞には「前置形容詞」と「後置形容詞」があることを理解できた初学者が次に突き当たる壁は「前置と後置で意味が変わる形容詞」である。つまり, 名詞の前にも後ろに置くことができる形容詞が存在し, その場所によって意味が変わるというものである。

【前置と後置で意味が変わる形容詞】

un *grand* homme 偉人
 un homme *grand* 背の高い人

un *pauvre* homme 哀れな人
 un homme *pauvre* 貧乏な人

la *dernière* année 最後の年
 l'année *dernière* 去年

une *grosse* femme 太った女
 une femme *grosse* 妊婦

la *haute* mer 沖
 la mer *haute* 満潮

この例も、フランス語で初めて目にするルールであるため学習者は困惑する。ある形容詞は前にしか置かれずある形容詞は後ろに置かれると習った後で、実は両方に置かれる形容詞が存在し意味が変わるというのであるから無理もない。それゆえ、こちらの前置と後置で意味が変わる形容詞は最初歩の段階では教えないことが殆どである。基本をまず教えてから、段階を踏んでこちらの形容詞に移ることが多い。しかし、よく見ればこれらの形容詞は「名詞の前に置かれる」といわれた形容詞群であることがわかる。しかも、ある一定の名詞としか結びつかないことが多い。大抵の教科書や参考書ではリストアップされているので例文と共に覚えていけばよい。それ程の数ではないので、初級から中級に上がるあたりでちょうどよいレベルかと思われる。前に述べたように、ここでも「名詞の前にくる時は主観的な判断」「名詞の後ろに来るときは客観的な判断」という考えが適用できる。

4. 性数の一致

フランス語の特徴として、もう1つ触れておかなければならないところに性数^{せいすう}という概念がある。これは、日本語にも英語にもない特徴である。ヨーロッパの言語は、名詞が人間と同じように性を持っているとみなされている。それは、文法上（さらに正確には発音上）分類されているものであって、見た目や女性が使うものまたは男性が使うものだからといったことは全く関係しない。男性が身に着けるワイシャツ（chemise）やネクタイ（cravate）は女性名詞であるし、女性が身に着けるブラウス（chemisier）やストッキング（collant）は男性名詞である。こちらも初学者には新しいことであるから（母国語の日本語にも既習言語の英語にもないルール）、繰り返し話すことは有用である。この名詞を修飾するものが形容詞であるから、形容詞にも必然的に性（男性形／女性形）の区別がある。そして、数（単数^{すう}／複数）の区別もある。形容詞の性数は名詞の性数に必ず一致させる必

要がある。基本は名詞の性数変化と同じで、女性形を作るには男性形に -e を付け、複数形は単数形に -s を付けるという形をとる。しかしながら例外もあり、重要とされる前置形容詞にこの例外が多い。これも初学者に「フランス語は難しい」と思わせてしまう一因であろう。基本的には上記のルールに従えばよく、一部の単語は発音を統一するために若干の例外が起こると教えると初学者は安心する。ルールがあるのにその習ったルールから外れた例外ばかりだと学習者は不安になりまた不満を感じるものである。以下、『新フランス広文典』より幾つか例を引用する。

【女性形の例外】

- ①男性形が -f で終わっているものは -ve に
sportif → *sportive* スポーツ好きな
actif → *active* 活発な
- ②男性形が -er で終わっているものは -ère に
premier → *première* 第一の
familier → *familière* 親しい
- ③男性形が -s, -ès, -en, -et, -ot, -el, -eil で終わるものは、語尾の死因を重ねて -e を付ける
bas → *basse* 低い
muet → *muette* 無音の
- ④男性形が -x で終わる場合は、-se に⁽³⁾
heureux → *heureuse* 幸福な
honteux → *honteuse* 恥ずかしい
- ⑤男性形が -eur で終わっているものは、-euse に⁽⁴⁾
trompeur → *trompeuse* 人を欺く

【男性第二形】

形容詞に続く男性名詞単数形が母音または無音の h で始まっている場合は、母音の衝突を避けるために男性単数形の 2 つ目の形である男性第二形というものが存在する。

le *nouvel* an 新年
un *bel* arbre 美しい木
un *vieil* homme 老人

こちらも初学者には難しいルールに見えるが、すべては発音上の問題（解決策）である。フランス語は母音を続けて読まない言語であるため、母音で終わる単語の後に母音または

無音のhで始まる単語が来る場合、前者の母音を省略させるか (le arbreがl'arbreになる例) 形容詞の男性第二形のように2つ目の形を取らせるものがある。よくみれば、男性第二形はまったく新しいものではなく女性単数形の発音を借り形を変えただけのもの (語末の-eとその前の子音) である。これも学習者に難しく考えさせないために、母音がぶつかるのを避けるために女性形を借りてきて男性形の形にしているだけと説明すると少しホッとするようだ。小さなことではあるが、次から次と例外が出てきているのではなく、大抵の場合は発音を保つための措置であると説明するのは有用である。

最後に、少し蛇足になるがフランス語の名詞において時折り単数形にもかかわらず語尾に-sが付いているものがあるのでそちらに触れておきたい。初学者を惑わす一例であるからである。この現象は、言語歴史上の理由があり、ancien français (11世紀から13世紀に使われていた古フランス語) に起源を持つ。この時代は、まだラテン語の名残があり名詞に格が残っていた。主語となる主格とそれ以外の働きをする被制格が存在していた。特に男性名詞において、主格では単数に-sが付き複数形はそのまま、被制格においては単数形はそのまま複数形に-sが付くという仕組みがあった。

主格単数	li chevaliers
主格複数	li chevalier
被制格単数	lo/le chevalier
被制格複数	les chevaliers

語末の-sはこの時代にすでに発音されなくなっていたため、名詞単独では単数複数の区別ができなかった。それで、冠詞でその区別が分かる被制格のルールが現代フランス語のルールとして残ったとされている。現代フランス語では、複数を表すとされる語尾の-sは実は言語歴史上の格変化形の1つであり、もともとは必ずしも複数を表す標ではなかったのである⁽⁵⁾。フランス語で息子を示すfilsは、まさにこの格変化があった時代の産物で、本来なら男性名詞の被制格単数形は-sが付かないfilであったが既に同じスペルで「糸」という意味の単語が存在したため主格単数形のfilsを採用したのである。例外にも意味があるので、すべてを説明する必要はないがレベルに応じて言葉が変化してきた背景を説明することは有用であろう。

まとめ

フランス語を習い始めたばかりの学習者の多くが躓きを感じる形容詞。元をただせば、母国語である日本語にはないルールが存在していることが1番の要因であるが、他の文法事項に比べて形容詞は殊更例外が多いことがその難しさを強調させる原因となっている事が分かる。かつて、"Ce qui n'est pas clair n'est pas français" (明晰名ならざるものフランス語にあらず) と言ったりヴァロル (Antoine de Rivarol, 1753-1801) の言葉はあまりに有名であるが、まずは基本となる法則を教え、それから例外の部分を少しずつ説明していくことが初学者を導くには最良の策であり、そこが非常に重要と言えよう。形容詞は

殆どの教科書で最初歩の段階で出てくるものであり、ここで躓いてしまうまたはフランス語は難しいと思ってしまう学習者はこちらが思っている以上に多いので、最重要だと思われる形容詞に絞って順を追って教えていく必要がある。

フランス語における形容詞が、なぜ前置と後置に分かれたのか、また学習者が躓くもう1つの原因ともなっている前置形容詞が不定冠詞複数の後に来るとdesがdeになった言語歴史的な分析は次稿で分析したい。

注

- (1) この場合の形容詞は品質形容詞を指す
- (2) 『新フランス広文典』, p.88
- (3) ただし, doux (甘い), faux (偽の), roux (赤褐色の) の3つの形容詞は, 女性系はdouce, fausse, rousseになる。
- (4) ただし, 次の比較級の形容詞は原則通り語尾に -e を付ける。
majeur 多い, mineur より小さい, meilleur より良い, supérieur より上の, inférieur 劣った, intérieur 内部の, extérieur 外部の, antérieur 前の, postérieur 後の
- (5) 『中級フランス語』, p.27

Références

- CHERVEL, André : *Histoire de l'enseignement du français du XVII^e au XX^e siècle*, RETZ, Paris, 2008
- DENIS, Delphine, SANCIER-CHATEAU Anne, *Grammaire du français*, le Livre de Poche, Paris, 1994
- GAILLARD, Bénédicte, *Le Français de A à Z*, Hatier, Paris, 1995
- GREVISSE, Maurice, *le français correct guide pratique des difficultés*, de Boeck supérieur, 2009
- MONNERIE-GOARIN Annie : *Le français au présent grammaire*, Les éditions Didier, Paris, 1987 (善本孝, 原田早苗, 西村亜子共訳, 『謎が解けるフランス語文法』, 第三書房, 2006年)
- NADEAU, Jean-Benoît, BARLOW, Julie, *The story of French* (立花英裕監修, 中尾ゆかり訳), 『もうひとつの国際共通語 フランス語のはなし』, 大修館書店, 2008年
- RIEGEL, Martin, PELLAT, Jean-Christophe RIOUL, René : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France(PUF) linguistique Nouvelle, Paris, 1994
- Von WARTBURG Walther : *Evolution et structure de la langue française* (田島宏, 高塚洋太郎, 小方厚彦, 矢島猷三共訳, 『フランス語の進化と構造』, 白水社, 2009年)
- 石野好一, 『中級フランス語文法』, 駿河台出版社, 2017年
- 河村克己, 『*Le français*』, 駿河台出版社, 1991年
- 木内良行, 『フランス語の統語論研究』, 勁草書房, 2005年
- 島岡茂, 『フランス語統語論』, 東京大学書林, 1999年
- 中村啓佑, 長谷川富子, 『フランス語をどのように教えるか』, 駿河台出版, 1995年
- 新倉俊一他, 『フランス語ハンドブック』, 白水社, 1999年
- 髭郁彦, 川島浩一郎, 渡邊敦也, 『フランス語学概論』, 駿河台出版社, 2011年
- 久松健一, 『フランス語文法』, 駿河台出版社, 2009年
- 丸山圭三郎, 西本晃二, 中森季雄, 『*Le Français par la méthode aurale-orale* 新しいフランス語』, 白水社, 1978年
- 目黒三郎, 徳尾俊彦, 目黒士門共著, 『新フランス広文典』, 白水社, 1982年
- 若林茂則編著, 白畑知彦, 坂内昌徳著, 『第二言語習得研究入門』, 新曜社, 2006年

Une étude sur les adjectifs français antéposés et postposés

NIHEI Megumi

Dans cet article, nous avons réfléchi sur les adjectifs français antéposés et postposés. C'est un point auquel beaucoup d'apprenants japonais ont de la difficulté. Il faudrait les guider en expliquant la différence entre les règles de la langue japonaise (la langue maternelle des apprenants) et celle de la langue française (la nouvelle langue) pour qu'ils puissent mieux comprendre.